

中国吉首大学外国語学部の日本語学科を訪問して

天 野 義 廣

筆者は2006年9月に、中国湖南省にある吉首大学の外国語学部日本語学科を訪問した。目的は、海外での日本語教育の視察、特別講義の実施、本学との学術文化交流の可能性を探ることの3つであった。以下、この訪問の概略について報告する。

キーワード：吉首大学、日本語教育、交流

1. 訪問に至った経緯

はじめに、吉首大学への訪問に至った経緯について記したい。

2005年11月23日に仁愛大学で「JICA中国青年教師との学習交流会」が開催された。中国国内から選抜された青年教師10名と武生市教育委員会、武生市日中友好協会の関係者が出席して懇談がなされ、会場である本学についての説明、施設見学なども行われた。その中国人教師達はいずれも日本語教師であった。その中に、湖南省にある国立吉首大学の外国語学院日語系（本稿では外国語学部日本語学科と表記）の潘貴民先生がいた。

筆者は本学の特別カリキュラム「仁愛大学コミュニケーション学科日本語教員養成講座」の特設科目を3科目担当している立場からその交流会に参加する機会を得、本学の日本語教員養成の実情についての紹介を行った。

当日の交流会の席で潘先生が「私の大学は日本語教育を始めて間がないので、日本の情報が知りたい。貴学と何らかの学術交流が持てないだろうか。」と発言された。筆者は本学の学術交流委員会の一委員として、海外の大学と何らかの交流を検討していく必要性を考えていたので、同席の加藤学生部長と相談の上、以後電子メールで情報交換をすることを約束した。

その後、両大学の教育体制や双方の日本語教育への取り組みなどについてのメール交換を、天野と潘先生との間で行ってきた。その間、「日本事情に関する講義をしに来てほしい。我々の学科も見てほしい。できれば今後貴学との交流を希望している。」という先方の学科の意向も伝えられた。海外、特に最も日本語学習者の多い中国での日本語教育の実情を視察することは、今後本学の学生への指導の参考になる点や、本学の学生が卒業後に日本語教師を外国で行う可能性がある点を踏まえ、同大学への訪問を決意した。

2. 吉首大学について

ここで、吉首大学の所在環境や規模等について簡単に紹介したい。

吉首大学の位置する湖南省は、揚子江の中流域、洞庭湖の南方に位置し、北部は洞庭湖と平野、中部は丘陵地帯、南部は山岳地帯となっている。水稻生産が盛んで、中国の主要な米産地である。

湖南省全体の人口は約6596万人(2001年)で、人種構成は漢族が大半であるが、山岳地帯にはミャオ族・チワン族・トン族・ヤオ族などの少数民族が約260万人居住している。

同大学外国語学部が立地している張家界市には、武陵源という重畳たる山岳地帯があり、1992年にユネスコの世界遺産（自然遺産）に指定されて以来、観光地として脚光を浴びている。韓国人の観光客が特に多く、年間約30万人が訪れているが、現在新たに日本人を対象とした観光客誘致に力を入れている。

吉首大学は、湖南省吉首市に1958年に創立された国立の総合大学である。現在22の学部が設けられている。学生数は約2万人、専任教員は約900人で、敷地面積は278ヘクタールに及ぶ。大半の学部は吉首市の本部キャンパスに設置されている。筆者が今回訪問した吉首大学外国語学部は、その分校である湖南省張家界市の張家界キャンパスにある。ここには学生が約5,900人、教職員が約400人いる。

本部キャンパスと張家界キャンパスとは、車で約2時間の距離にある。この分校には外国語学部（日本語学科・英語学科）の他に、美術学部、情報管理学部、都市農村企画学部、韓国学部がある。この張家界キャンパスは全寮制で、学生全員がキャンパス内の寄宿舎で生活している。学生は地元湖南省出身者が約7割で、その他は全国各地から来ている。日本語学科は前記の通り2003年に設置され、まだ卒業生は出ていない。

日本語学科が新設された背景には、張家界が観光地として今後大々的に日本人旅行者を受け入れようとしている点や、2001年の中国の世界貿易機関加盟を契機に近年特に日本企業の中国への進出が増大しており、交流の担い手となる日本語運用能力を持った人材の育成が課題となっている点がある。

日本語学科の在学学生数は、現在1年生60名、2年生47名、3年生65名、4年生45名で、計217名である。日本語学科の学生の約3割は、卒業後地元で日本の観光客相手のガイドや店、ホテルなどでの仕事を考えており、他の学生達の多くは、海に近い地域（北京や上海など）での日系企業に就職することを望んでいるという。

3. 訪問日程

訪問の日程は次の表の通りである。この訪問は筆者の研修活動の一環として行い、旅費は本学の研究旅費を使用した。なお筆者は吉首大学訪問後、続けて北京に2日間私費で滞在した。表にはその間の日程も含めてある。

9月18日(月)	午前	○自宅発 (6:00)
	午後	○中国国際航空便で関西国際空港発(14:00)。北京空港着後、同空港で国内便(中国国際空港便、張家界空港行き)に乗り換え。 ○張家界空港着 (20:35)。同空港で吉首大学外国語学部の先生方2人の出迎えを受け、車で約10分離れた同大学構内にある賓客・教員用ホテル着。 ○同ホテル宿泊。
9月19日(火)	午前	○大学内の食堂で朝食 (同大学の先生方2人と)。 ○日本語学科3年生の授業を見学 (8:00 ~ 8:50)。 ○日本語学科4年生の授業を見学 (9:00 ~ 9:50)。 ○キャンパス内見学 (10:00 ~ 11:00 同学科の先生方5人同行)。

中国吉首大学外国語学部の日本語学科を訪問して

9月19日(火)	午後	<ul style="list-style-type: none"> ○日本語学科の先生方6人と懇談 (11:00 ~ 12:00 同学科の現況, 取り組み等). ○市内の食堂で先生方3人と昼食. ○日本語学科の学生15人との交流会 (15:00 ~ 17:00). ○筆者の歓迎会 (18:00 ~ 19:30 学部長はじめ日本語学科の先生方など10人出席. 市内のレストランで). ○筆者の日本語による特別講義 (20:00 ~ 21:30). ○日本語学科の先生3人と日中文化, 日中交流などについて懇談 (22:00 ~ 23:30). ○大学内のホテルで宿泊.
9月20日(水)	午前	<ul style="list-style-type: none"> ○大学近くの食堂で朝食 (同大学の先生方2人と). ○日本語学科3年生の授業を見学 (8:00 ~ 8:50). ○英語学科の3年生の授業を見学 (9:00 ~ 9:50). ○日本語学科の先生方5人と日本語教育について懇談 (10:00 ~ 11:00).
	午後	<ul style="list-style-type: none"> ○大学内の食堂で昼食 (11:30 ~ 13:00 同大学の先生方4人と). ○張家界市内見学・買物 (13:30 ~ 14:30 同大学の先生方3人と). ○交流についての相談会 (15:00 ~ 17:00). ○筆者の送別会 (17:30 ~ 19:00 市内のレストランで. 学部長ほか外国語学部の要人など8名と天野出席). ○張家界空港へ出発 (19:00 学部長ほか4人, 空港まで見送りに来られる). ○張家界空港発 (20:30). 北京空港着 (22:40). タクシーで約40分後, 北京市内のホテル「ノボテル新橋」着 ○同ホテル宿泊.
9月21日(木)	終日	<ul style="list-style-type: none"> ○朝食. ○旅行者の北京1日観光ツアーに参加 (8:30 ~ 18:20 総勢7人). 天安門広場, 故宮博物院, 万里の長城等を見学. ○北京市内の劇場で京劇を鑑賞 (18:30 ~ 21:00). ○ホテル「ノボテル新橋」2泊目.
9月22日(金)	午前	○朝食・荷造りなど.
	午後	<ul style="list-style-type: none"> ○同ホテル発 (12:00). 北京空港着へ. 昼食, 買物等. ○中国国際航空便で北京空港発 (16:20). ○関西国際空港着 (20:00). ○関西エアポートワシントンホテルに宿泊.
9月23日(土)	午前	○同ホテル発 (8:40).
	午後	○自宅着 (14:30).

なお、吉首大学滞在中の宿泊・食事については、実費を筆者が負担することを申し出たが、結果的には吉首大学のお世話になった。ここに記してお礼申しあげる。

4. 今回特にお世話になった先生方 (敬称略)

滞在中、下記の先生方には特にお世話になった。他に若い女性教員が4名おられた。そのうちの1人は日本のJICA (独立行政法人国際協力機構) から派遣されている日本人教師であった。

氏名	役職その他	性別・世代
彭 正銀	外国語学部長. 英語担当.	男性 50歳代.
戦 憲斌	清華大学教授. 2006年9月から吉首大学外国語学部に特任教授として赴任. (筆者の帰国後, 新設された吉首大学日本研究所の初代所長に就任)	男性 60歳代.

馮 国録	外国語学部日本語学科の学科長. 現副教授.	男性 40歳代.
潘 貴民	日本語学科教員.	男性 30歳代.
羅 琳麗	英語学科教員. 訪問中, 英語で筆者にガイド役をしてくださった.	女性 20歳代.
木村一人	日本語学科教員. これまでフランス, ベトナムなどで日本語教師を歴任.	男性 30歳代.

5. 日本語の授業の見学について

滞在中, 次の通り4回授業を見学させていただいた. それぞれの科目や教授内容は異なるが, ここでは特に印象に残った点について記したい.

No.	授業月日		教員	学生	教員の使用言語
1	9月19日(火)	8:00 ~ 8:50	中国人の男性	日本語学科3年生 約60名	中国語と日本語
2		9:00 ~ 9:50	中国人の男性	日本語学科4年生 約40名	中国語と日本語
3	9月20日(水)	8:00 ~ 8:50	日本人の男性	日本語学科3年生 約60名	日本語
4		9:00 ~ 9:50	中国人の女性	英語学科3年生 約100名	中国語と日本語

授業は50分間で, 出席はとっていなかった. 全寮制であり, 授業は出るのが当然なので, よほどでない限り欠席しないとのことである. また教員は全学生の顔と名前を知っており, 学生も欠席する場合は事前か事後に申し出るため, 出欠を調査する必要がないとのことであった. 出欠調べに要する時間が惜しいと言う先生もあった. 全回を通して数人の遅刻者があったが, 大半の学生は授業前から席に着き, 教科書やノートを開いていた.

授業態度は教師, 学生とも真剣であった. 日本から来た筆者が見ているという事情を割り引いても, 授業態度や発言の積極性などから毎日の学業への熱心さが十分に推察された. 時々自発的な質問が出され, また教師からの質問に対しても積極的に反応する学生が多く, 同時に複数の学生が立ち上がって答えようとするような場面もあった. また男女共に熱心にノートをとっていた. 「学習風土の差」という思いが脳裏をよぎった.

これらについての印象をある先生に伝えたところ, 次のような事情を説明された. 「この地方の一般家庭で子供を大学に進学させるには, 経済的負担がかなり大きい. それで学生も入学したからには勉学の成果を上げて就職に結び付けなくてはならないと考えている. 学生は, 家族の支援に報い, 貧困から脱却して豊かな未来をつかむためには, 自己的努力で勉強する他ないことをよく自覚している. また大学側も, 他大学や地域に対して, 学業面や就職面での実績を出すことが厳しく問われており, 成果が予算や教員評価や教員配置などに結びついているので, 教員も手を抜けない.」

教科書に出てくる文例や文章は, 全体的にはやや文語的傾向が強いという印象を受けた. 先生方も「中国では日本で作られた本を教科書としては使うことは認められていない. 現代の日本語会話で使われている表現より古いもので教えざるを得ないので困っている. 中国で日本語の新しい教材が作られるのを待っているのが現状だ.」と言っておられた.

もう1点特筆すべきは, 学生達の声の大きいことであった. この点については, 筆者が本学の学生達5名をかつて「鯖江青年の家」で行われていた中国人実習生約30人対象の日本語教室に連れて行った際, 中国の若者に「日本の若者はなぜ皆声が小さいのか」という質問を受けたことが思い出される. 中国語の発音は四声があるため大きい声で言わないと発話内容がつかめない, と

いう解釈もあるが、本当のところはどうなのであろうか。筆者が見学した他の日本語教室でも、確かに中国人学習者の声は大きかった。

なお、昼休みや放課後、注目すべき光景を目にした。教室棟は6階建ての鉄骨立てとなっており、教室の横がベランダ状の廊下になっている。その手すりに多数の学生がもたれながら教科書の日本語を大声で朗読しているのである。中庭をはさんで向かい側の英語学科の方でも同様の光景が見られた。向こうでは教科書の英文を読んでいるのだという。ひたすら教科書の文章の音読によって、文章を暗誦して力をつけるそうである。立ち話をしている学生の姿も見られるものの、所在なさそうにしている学生の姿はほとんど見られない。ちなみに、髪を染めたり化粧をしたりしている学生も見かけられず、華やかな服装の学生もほとんどいなかった。この地方は一般に経済的には低水準にあるとのことであったが、質実剛健という印象を持った。

一般の授業とは別に、4年生には卒業論文が課せられ、各先生の下で研究するという。戦先生の場合、担当学生の卒業論文には次のようなものがあるとのことであった。〔川端康成論・日本の武士道について・日本人の答礼・日本語の曖昧さについて・日本の映画論・利千休の茶道・日本語による動物の象徴意味〕しかし大学にはまだ限られた文献しかないので、日本関係の図書を揃えることが急務だと言っておられた。

6. 筆者の行った特別講義について

講義は、「日本における漢字の受容」と題して、同大学内の大講義室で9月19日の午後8時から90分間実施した。日本語学科学生の希望者約100名が集まり、関係の先生方も聴いてくださった。筆者は中国語ができないので日本語で話し、日本語学科長の馮先生が適宜通訳・補足説明をしてくださった。先生方によると日本語学科の3年生、4年生なら日本語で話してもおおよその内容は理解できるとのことであった。

題目の「日本における漢字の受容」は、日中両国の歴史を踏まえて用意した。漢字の受容は日本人の言語生活、ひいては精神生活に多大な影響をもたらしている大きな歴史的事実である。また日本における漢字・ひらがな・カタカナの用法は、漢字の本家である中国人が日本語を学習する際にも重要な項目となっている。なお、筆者の講義は、次の順序で行った。〔①漢字の伝来、②音読みと訓読みの発生、③ひらがな・カタカナの誕生、④アルファベットの伝来、⑤現在の日本語の表記体系、⑥現在の日本の漢字事情〕

講義のための下調べを行い、また真剣に聴いている中国の学生達に話をしながら、漢字を媒介とした両国の縁の深さを改めて感じた。通訳付きの話は筆者にとっては初体験であったが、得難い機会を与えられたことに感謝している。

7. 吉首大学外国語学部の関係者との相談会

9月20日の午後3時から約2時間、外国語学部の会議室において、両大学の今後の交流を視野に入れた「相談会」(情報交換会)が行われた。この会議の目的は、①両大学の日本語教育についての現状についての情報交換をし、相互理解を深めること、②今後の両大学の交流を視野に入れた意見交換をすることの2つであった。この会には彭外国語学部長、大学本部外務室主任、日本研究所所長予定者の戦教授、日本語学科の先生方、それに筆者の計11名が出席した。筆者は事

前に持参した本学の大学案内パンフレットを配布し、先生方に見ていただいた。大半の出席者は日本語会話が可能であったが、馮先生が日中両言語の通訳をされた。

相談会の冒頭、外国語学部長より丁重な歓迎の挨拶があった。その趣旨は、「日本と中国は地理的に一衣帯水の隣国であるだけでなく、歴史的にも二千年以上の友好往来と文化交流の伝統がある。過去に不幸な関係の時期もあったが、双方の発展のため未来志向でさらに親善友好を深めていきましょう。」というものであった。

これに対して筆者は、謝辞の後、次のように述べた。「この場では、仁愛大学との学術・文化交流に関する貴学院日本語学科のご意見やご要望をお聞きすることになっている。しかし今の段階では仁愛大学としての公的な回答はできないので、個人的な立場で仁愛大学の実情等を申しあげたい。お聞きした事柄は大学に持ち帰って、可能な交流のあり方を検討していきたい。」

以下は、この相談会で交流問題について話題となった事柄をまとめたものである。

No.	吉首大学側の意見・要望	筆者の返答
1	日本国内の日本語教育の実情などの情報を知りたい。	天野も中国国内のそれについて知りたい。天野個人ができる範囲でご協力したい。
2	日本語教育の教材や副読本、資料などが不足している。実費で集めたいので情報がほしい。	天野個人ができる範囲でご協力したい。
3	本学学生の日本留学は、経済的な問題や渡航手続の問題などで、当面は無理だと考えている。	事情は理解した。なお仁愛大学には、外国人留学生入試の制度があり、窓口を開いている。
4	日本の学生がこちらへ訪問もしくは勉強に来るのは大歓迎である。1人でもいいから来てほしい。なお吉首大学ではイギリスの3つの大学と交流関係を結び、例年30人ぐらいのイギリス人学生が本学部を訪問している。また韓国、アメリカ、ブルガリアの大学とも交流関係を持っている。	仁愛大学は中国語専攻のクラスがないので、学生が貴学に勉強に来るのは難しい。しかし短期間の中国研修旅行を計画して、その中で2日間ほど貴学を訪問し、授業参加や学生交流をすることは可能かもしれない。教員による情報交換、相互訪問、視察などの交流のあり方は現実的であると思う。
5	歴史の浅い本学の日本語学科では、若手教師の育成を最大の課題としている。そのための1つとして本学の若手の教師を一定期間（3か月、半年、1年など）日本の大学で勉強させたいと考え、それが可能となる日本の大学を求めている。日本語教育に関する研修だけでなく、日本の教育方法、学生達の姿、日本の生活、世の中の動きなどを見聞し、日本語の中で生活してくることは、本学での学習指導にはかり知れない教育効果を与えると考えている。	ご要望については帰国後本学の該当機関等の場で報告し、検討していきたい。なお仁愛大学の在学学生・卒業生が日本語教育の海外実習体験を希望した場合の実習先の1つとして協力していただけるとありがたい。
6	この度本学に日本研究所を設立することになった。これについて日本の文化、歴史、生活、教育などにわたる図書収集が大きな課題となっている。これに関する情報提供、文献購入についてのアドバイスなどの支援をしてほしい。	大きい課題なので、即答はできないが、天野個人は可能な範囲でご協力したい。
7	交流は互惠平等を旨とし、経済的負担は相手側の大学に迷惑をかけない形での交流を考えている。貴学の学部または学科との交流を望んでいる。	天野個人も同様の考えを持っている。帰国後その方向でしかるべき場を通して検討したい。小さな取り組みを重ねていければと考える。

8. その他の情報など

これまで記してきた事柄以外で、筆者がこの訪問について考えたことや見聞したことのいくつかを、以下順不同で記す。

(1) 事前の準備について

筆者はヨーロッパやアメリカへの団体での旅行経験はあるが、今回の中国訪問は初めての、しかも単身での旅であった。従って、今回の旅行には未知の隣国へ足を踏み入れることへの期待感がある一方、さまざまな不安が伴った。

事前にできるだけ予備知識を持っておこうと、中国旅行の案内書やインターネットによって、中国についての情報を得るようにした。特に中国を旅行した人の体験記は参考になった。タクシーや買物では高値を吹っかけられる可能性のあること、偽札に注意すべきこと、場所によってはみだりに写真を取らないこと、スリに注意すべきことなどという、体験を踏まえた記事を読むにつれてむしろ不安が高まった。空港の換金所でも「最近偽札が出回っているので注意して下さい」と念を押された。入出国の手続きや空港内の案内図などについては雑誌記事やインターネット記事のコピーを携行した。国内・国外で使用できるレンタルの携帯電話も空港で借りた。

渡航手続に関しては、中国に視察・研修・会議・講義などの目的で訪問する場合はFビザという特定種類のビザが必要となる。そのため、吉首大学から特別講義への招聘状を郵送してもらい、旅行代理店を通して中国領事館で申請した。このFビザの認定・発行が出発予定日の数日前までかかり心配した。

また、言葉の上での不安もあった。筆者は中国語を勉強したことがないので、遅まきながら中国語の入門書を出発の1か月前に2冊買い込み、にわか勉強を始めた。文法的な特色はやや理解できたが、発音が分からないので、主要な簡体字とごく簡単な挨拶程度しか覚えられなかった。吉首大学では日本語の話せる先生方がおられる。しかし大学以外の場では行ってみなければコミュニケーションがとれるかどうか分からない。こうした不安を抱えたままの出発となった。

(2) 吉首大学の将来性について

吉首大学張家界キャンパスは、すでに整地され利用されている校地の他にも広大な所有地があり、新しい学部や研究所の設立を今後いくつか予定している。キャンパス見学の際、重機などで開拓している敷地も回りながら「あの山も全部うちの地面です。まだまだ施設を作る計画をしています。」との説明を聞いて、当大学が将来性を持っていることを実感した。中国政府もこの地方の教育や文化、生活、産業等の水準を高めるために吉首大学の発展には力を入れているという。中国がさまざまな面で高度成長の段階にあることはマスコミ等で見聞するが、この地方やこの大学においてもその傾向が見られるように感じられた。

(3) 学生達の日本への関心について

9月19日の午後3時から2時間、日本語学科の学生約15人との交流会が開かれた。先生方は学科会議のため在席されず、各学年から選ばれた男女の学生達が、ある部屋に集まってきた。1・2年生は複雑な構造の文になると理解しにくくなるので、筆者は平易な日本語で話すように心がけた。学生達からは活発に質問が出された。「小泉首相はなぜ靖国神社に参拝するのか」「日本の学生は

中国のことをどう思っているのか」「日本が開国以後急速な発展を遂げたのはどうしてか」「日本へぜひ行きたい。日本の留学事情はどうなっているのか」「中国やこの大学の印象は?」「日本人には中国人への差別感があると聞くが本当か」「日中友好で大切なことは何だと考えるか」「中国の文化で関心を持っていることは?」「日本の大学と中国の大学とはどう違うのか」「日本人の大学生はどんな生活をしているのか」「大人が漫画を読むのをどう思うか」……なるべく判断の根拠や具体例を挙げながら答えるようにした。彼等は、日本の若者文化や経済力については強い興味関心を示したが、政治的な面では日本政府の対応には批判的であった。先生方は政治的な話題は出されなかったが、学生達はそうではなかった。真剣なまなざしで日本政府の中国への対応は理解に苦しむと言うのである。これは国家の教育や報道等の方針による面が大きいように思われた。筆者の意見を短時間で相手に理解してもらえるように説明することは無理だと考え、簡単な回答に留めた。先生不在であったが、それだけに彼ら学生の率直な思いを知ることができた。また質問の活発さに驚いた。厳しい姿勢での質問もあったが、彼等は友好的かつ熱心で、交流会が終わったときには大きな拍手と笑顔で送ってくれた。また日本の学生にもぜひ来てほしいと言っていた。

(4) 軍事教練について

当大学は毎年新学期が9月から始まるが、入学当初、新入生の男女全員に約半月間、軍事教練が行われる。筆者が訪問した日もキャンパス内のあちこちで、約50人単位で歩行、静止、ランニング、模擬銃による操銃などの訓練が実施されていた。何分間も片足を上げたままの姿勢を保持するなど、相当に厳しい訓練であった。軍隊からの将校も指導監督に派遣されていた。実際の訓練は上級生が志願して指導するという。教練は晴雨に関わらず朝から開始され、遅い日は夜9時ごろまで連日実施される。男女とも入学時に購入したという草色の迷彩服を着用して、真剣に取り組んでいた。隊列を組んで行進する横を、授業の合間に私服でリラックスして上級生が通り過ぎる光景には忘れ難いものがあった。期間の終わりには班ごとの訓練の成果が評価され、その審査でよい成績を出して表彰されることが大きな名誉になるという。日本の学生達の現実との大きな落差を実感した。軍事教練は他の大学でも必ず実施しているという。なお「公安」と書かれた自動車が大学のキャンパス内に常駐しているのも印象に残った。しかしかつての時代の共産党による一党支配は、近年徐々に緩和されてきているらしい。

(5) 市内の様子について

戦先生、潘先生の2人に案内され、9月20日の午後、車で張家界の市内見学に出た。大学の正門前で乗った車は6人ほどが乗れる中古のライトバンで、乗り降りの場所は任意で1回2元(約34円)であった。かなりの中古車で驚いたが、ここでは当たり前のようであった。新車らしい車はほとんど目にしなかった。この大学を辞去した後に訪れた北京市内は、道路が舗装整備され、通行車両の種類や警笛が制限されているので予想外に静かであったが、この町では、道路は舗装されていない所が大部分で信号がなかった。その道を車やオートバイが猛スピードで警笛を鳴らしながら砂塵を上げて走っている。この市内見学の前後に筆者は町の道路を何回か横断したが、交通量が多く、その時は細心の注意を要した。

町の大通りを過ぎた後、車から降りて、張家界市の一角にある市場街へ買物に出た。張家界の市場街は、乗り物の騒音以外にも人の話し声や売り子の呼び声などで喧騒を極めた。一般の買い

物客をはじめ、野菜や木の実などを入れた籠を天秤棒で担っている田舎からの行商人、自転車の人、多数の露店や商店の人などで、通るのが困難なほどであった。道端ではあちこちに、一休みする人達が腰を下ろしていた。腰掛けて客を待っている占師のおじいさんもいた。人々の服装は概して質素であった。つぎの当たった服を着ている人もいた。ふと、我々日本人は「つぎ」という言葉を忘れたなと思った。

突然、全員が赤い服・赤いズボンをもった数10人のおばさん達の隊列が、横断幕を先頭に太鼓やドラをにぎやかに叩きながらやってきた。なにかの宗教行事かと思ったが、聞いてみると、ある商店が開業したので、その宣伝行列をおばさん達を雇って行っているのだという。

話に聞いていた「買物の値段は交渉により決まる」というのは本当であった。特産の壁掛けばかりを商っている店に入ると、どの品物も値段が表示されていなかった。私がある品物の値段を戦先生の通訳で尋ねたところ、160元と言われた。その品物のある位置と形や色を店の外にいた地元の潘先生に伝え、やや時間をおいて彼が店に入って交渉したところ、50元で買ってこられた。よそ者、とりわけ外国人には高く売りつけるのだという。当地の商習慣かもしれないが、生活の貧しさが関わっているのではないかと思った。ただし物価は日本と比べて非常に安かった。露店や個人商店に対して、国营の商店やスーパーマーケットなどでは、定価どおり買物をする事ができた。なお、それらの店の出入り口には何人もの警備員が客のチェックに当たっていた。平日でありながらどの店も買い物客でかなり混んでおり、そこに日本の都会でも見られないような当地の生活のエネルギーを感じた。「交通事故やスリに遭わないように気をつけてください」と念を押され、緊張の連続であった。道を歩くのも自己責任という大げさであろうか。大きな建物も立ち並ぶ町の中心を外れると、昭和30年代の日本の田舎のような風景が広がっており、ある種の懐かしさを感じた。

(6) 言葉の問題について

今回、漢字には大いに助けられた。いうまでもなく日本は漢字文化圏に属している。漢字は表意文字であるため、発音ができなくても文字を見れば大意はつかむことができる。日中間で字体の異なる文字は少なくはないが、空港内や大学内などでの掲示や商店の看板の7割程度は、見れば理解できたように思う。この点では日本に最も近い韓国へ行くよりも好都合であると感じた。確かに日本人の中国語学習、中国人の日本語学習においては、漢字のお蔭で、他の外国語を学ぶよりは読み書きの面でともに有利だと言えよう。

漢字によって中国の先生方とのコミュニケーションも楽しむことができた。筆者の知っている諸子百家の文章の一節や好きな漢詩などを紙に書くと、もとよりそれらは先生方も知っておられ、それにちなむエピソードなども紹介されるなど話が弾んだ。また学生達に日本で知られている漢文出自の故事や格言、四字熟語、たとえば守株・臥薪嘗胆・愚公移山などをいくつか示してみたところ、たいしては知っていた。中国出自の語句であるから当然のことではあるが、漢字を共有しているという文化的なつながりの深さを再確認した次第であった。

一方、北京でのホテルや北京空港では、手続きや問い合わせなどで少し込み入ったコミュニケーションをとる際には、筆者は中国語を話すことも聞くこともできないので苦勞した。旅行関係の係員の多くは英語が話せたので助かった。しかし場所によっては英語も通じない事態がしばしば生じた。その場合はジェスチャーや漢字による筆談を試みたが、要領を得ずに別れることもあった。

ちなみに、北京のホテルで目撃した忘れられない光景がある。バイキングの朝食会場でのことであった。ある日本人客のおばさんが、ご飯用の茶碗が見当たらないと見えて、中国人のウェイターに片手で茶碗を持っているしぐさをし、頭をかしげて見せた。すると彼は碗の置いてあるテーブルの方向を指さした。それだけでコミュニケーションは成功したのである。

9. 終わりに

今回の中国訪問は極めて短期間のものであり、中国の実情の一端を見たに過ぎないが、筆者にとっては海外での日本語教育のあり方の一面を始め、多くを学ぶことができた。見聞したことを自分の財産として今後の授業や研究に活かしていきたい。

現在日本の大学では、さまざまな形で海外の多くの大学と学術文化交流を行ったり、姉妹校の提携を結んだりしている。中には交換留学生制度や研究員制度などを行っている場合もあり、数年に一度の相互訪問を実施しているところ、特定のコースや教員間の範囲での交流など、さまざまである。2001年に開学した本学は、2005年にカリフォルニア州立大学フラトン校と学術文化交流関係を結び、教員や学生の相互訪問を進めてきた。今後さらに海外の大学と学術・文化交流の輪を広げることは、日本語教育の面に限らず、異文化理解、コミュニケーション研究、地域活動などいろいろの面で本学の教育・研究に寄与する可能性があると考えられる。

この度の視察により、筆者は、当学科は教員・学生ともに前向きに取り組んでいるとの印象を持った。交流候補の大学の1つとして、無理のかからない、永続可能な交流のあり方を模索しつつ、学内で交流に関わる提案を行っていきたいと考えている。

最後に、今回の訪問で終始懇切な対応をしてくださった吉首大学の関係者各位に厚くお礼申しあげる。